

出羽太平記

四

K
209.5

テ"ワ

4



出羽太平記卷之四

目錄

難處落城五十一 附佐本秀綱五十二 在角上落河

小野光安五十三 賴奉

草刈備前守高續五十四 謀策

附水晶山由來五十五 奉

附惡屋形小野出將光安滅亡五十六

太平記



庄内と玉氏一揆之事
附十九里原人合戦之事

K209.5
P4



兼山は越前香網在角光安義の
香網長山初より北と南と之際十九里隔
て懸絶しらの初の間を兼山と在城せしを
宇田天皇武代の後亂作本深義香義買
作本曲部言洞の古孫やと依本曲部香
徳も生年十六歳の勇士と云は玉中と
或は義光の不知と傳ふは下も考る徳本少
なれども義光の不知と傳ふは依りて使ふ

急いそき山やま籠かごり出で仕し有あり三百さんひゃく俵ひょう買かひれり出で仕し有あり
秀ひで徳とく大だいに也なり我われが佐さ木きの家いへと主しゅ持ぢにん
姓せい系けい圖と七しち省しやう三さん徳とく一いつ所しよ徳とく文ぶん代だいの百ひゃく部ぶを
卷まめあれば今いま守しゆ備びへしむる人ひと連れんひの上のうへ
皇みかど帝てい又また征せい夷い大だい將しやう軍ぐんの印いんをえり然しか
る今いま義ぎ光くわうもどる威い勢せい海かい大だいの如ごとくあれは
て系けい圖とをち拾しゆ得とく系けい杯はいは思おもひもすし原はら也なり
以もち印いんのちえりしむる便べんに馳ち脚きゃく始はじめに成なり

中ちゆう上じやうの如ごとく義ぎ光くわう公こう守しゆ百ひゃく一いつの如ごとくは付つ列れつを殺ころ
押おす中ちゆうの如ごとく一いつとて際さい際さい左さ右みぎ被ひ殺ころせし組ぐみ
野の下したに徳とく徳とく平へい組ぐみ陸りく地ち方かたに陸りく長ちやう力りき大だい藤ふじ少せうとて
今いま上じやう十二じふに徳とく千せん七しち百ひゃく金かね藤ふじ義ぎ光くわう公こうの如ごとく正せい行かう
其その者もの三百さんひゃく人ひと今いま上じやう七しち百ひゃく金かね騎き倒たふし九く人にんに也なり
お後のちの如ごとく連れんれり今いま上じやう六む月げつ甲が辰ちん六む月げつ
十日じふにち辰ちんと一いつ天てん今いま上じやう山さん形かたをえり日にち千せん万まん親せ也なり下した祭まつり
向むかひ一いつ為なる山さんの如ごとく今いま上じやう七しち百ひゃく金かね騎き倒たふし九く人にんに也なり

野陣を後み日まあし押とせ義光公自
別々山をよこし高山に登り城の神を
の西北に懸門とし大川城を口
南に深田を東に平尾離を東向し山城
津田の舟と平尾湯を根切り峯の上を
逆舟本川二重く柵を張り川の中六乳
柵をお大隅を流しちむしよの舟は枝懸
水向を引け上すハ柵を張り樽こくハ矢

抄目よりち鳥籠の夫を扱へ行を
大子の門より甲冑の由と星を輝し
長刀の切先を扱へ行く義光公を
ハアラ車く一の歌の要害や能く鬼神
か楠を籠るくも扱目をもてハ深尾城
の地を利金江御ならバカ者ら小ら魚りす
中を重のこてハ深尾城の舟懸川
然し同く東南北の三方を包む白城

と飯山の腰を握り切柵を推し進み本を以て
相を陣陣を渡り城中の吾糧を以てつは
ふ美光も白旗を納ししく徳正の士民を安
撫する度所海軍も固真道真も其の率
る一より城中の兵士は徳正を擁護し退
屈しとんとしお終に城中に井一ありと
ふもあつたまゝに流石の地をほしむるを
せんがおもく難兵夫士の作中あつた

水を得るはあの日兵を身へ次は
い音より兵を休むの所をくみむるを
あつた体勢一なり紀りも申しあつた人
ものごとく討たれらるる徳正を以てあつた
とて軍も思ひ次の所を制限しぬるを
あつたその先難兵を以てあつた立寢免の法
百余人を以てあつた水を得るはあつた
の体兵新にあつたあつたあつたあつた

と名は中へ取付行かんといふれが百条
人程兵指取の作散と射をたれど
おろそのとまうれ道余を取るゝのを
深き自より口出くうはあさそを
降取一草の儲あも高橋の嫡子茂田
兵庫氏末續は由と身と名譽出四人
卒一橋より欠入歌三崎切房一丸花
ちぶしと戦ひたる陣中の兵士の指取は

射とるる主従又人毎百はく珠をた
修と同花の射俵の中と末續行も
看より妻の眼を射貫きぬえんすれ
其叶いどは橋やと道うと名一歌のこ
備とみふみたる上や中と我々家上か
取も女将源義光公の正白草の儲あも高
橋の嫡子茂田は高橋末續といふの
二天道よとんを奉り汝おがたん

しんしん言ひし朽果る車の白きしんしん
一雷と生く我を射つての九音の
目く破れし一雷はひらきせん建立ス
と云ふは城中の兵走つて首お断切
と断つた居間を住み城中に引こくは時
お年の大群衆のひらき断ちわ引つた
カラなくが降つてしんしん相城中の兵事後
か首を突換へしんしんを引つたわんわん

眼色しんしん言ひしんしん人毎この
んしん最後の一言しん魔道しん雷
成るしんしん雷をえんしんを振りしん
る具記器伝しん所の物なほしん
只一遍の物しんしんを信ぬ人しん
んしんしんしんしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしんしんしんしん
か電しんしんしんしんしんしんしんしん

城中の兵たを是を市濱が七竜りんと肝
魂たましいも身みもをとりとんをさうと身みは先まもよま
中ちゆうへの兵庫頭とおある一木有あり個こが一教いちけう
作しやう本武部とらう大將の下の是恒ちか悪あく
口くちは面めんとらう強ちやうらの口利くちたりたて成なり部ぶて
おと引ひ果はとらう一いが忠義本懐を討うて言い
名なをさうれらる市濱が三日の日の遊あそぶら
んととらう一い何なに行い免まぬとらう言いてくもさうら

思おもひはるが今又いままた雷かみなり初はつ雷かみなり電かみなり一いっ風かぜ自よらるる
たは我われらとらう一いつと母ははの鳴な呼よりまはるは友
これと信しんじも都みやこを討うてやゆとせのう
末すえ信しんじのとらう雷かみなり信しんじらるる母ははの呼より
とらう勝かちと其その親おやさまの利きとらう成なりとらう猶なほとらう
雷かみなり信しんじらるる一いつと蔵くらとらうめとらう我われ社しゃ
弟あに州しゆう備び守しゆうの孫まごの氏うぢ田でん兵庫頭へいこづかみ末すえ信しんじ
中ちゆうへの我われを討うて奴やつ系けいとらうのひとらうせん

目とらふつめた自をさるるが事なれども
南は百の雷を為さるる一丁が忠義が
呵々たるるるに命にさるるの言は虚言を
す一が何やん忠義の言は虚言は
言はるるが雷電風雨はさるる人今若
是を身なまはれおれが厄難をさるる
十とれ指も指を胸を破り心の脆を
此一舌を腹の腑をさるるが忠義が

はと喰はせし事一は是を身な人
おそれたるるるに彼を忠義の大忠義
の者や一人は命を破り一人は衰へたるる
人物や一人は命を破り一人は衰へたるる
一が天罰の言は虚言は
今かこの事も言は義光公は
あはたふ事一は成之日も言は虚言
殺したるる事一の事一は命を破り味方

をさつこのまはしん末續が討とるうや
七膳^{しちだん}をやまをさつこの後本陣より下知^{しげ}は
おとせしるしん陣中よりおとせしるし
出合^{でがひ}のまはしん軍法^{ぐんぽう}を中^{ちゆう}に三^{さん}膳^{だん}は
野^のと魚^{いさな}しと下^{した}若^{わか}く是^{こゝ}を守^{まも}るん^んとは
陣^{じん}の船^{ふね}の^え案^{あん}の^えしん陣中^{じんちゆう}の^え無^む難^{なん}は
ては三^{さん}膳^{だん}の^え牛^{うし}馬^ばを^え殺^{ころ}す^ん^ん兵^{へい}の^え策^{さく}
中^{ちゆう}の^え無^む難^{なん}は^え若^{わか}く是^{こゝ}を守^{まも}るん^んとは

もさつこのまはしん末續^{せいのり}が討^うとる^んうや
七膳^{しちだん}を^えやまを^えさつ^んこの^え後^ご本^{ほん}陣^{じん}より^え下^{した}知^ちは
おとせしるしん陣中^{じんちゆう}より^えおとせしるし
出合^{でがひ}の^えまはしん^ん軍法^{ぐんぽう}を^え中^{ちゆう}に^え三^{さん}膳^{だん}は
野^のと^え魚^{いさな}しと^え下^{した}若^{わか}く^え是^{こゝ}を^え守^{まも}る^んと^えは
陣^{じん}の^え船^{ふね}の^え案^{あん}の^えしん陣中^{じんちゆう}の^え無^む難^{なん}は
ては^え三^{さん}膳^{だん}の^え牛^{うし}馬^ばを^え殺^{ころ}す^ん^ん兵^{へい}の^え策^{さく}
中^{ちゆう}の^え無^む難^{なん}は^え若^{わか}く^え是^{こゝ}を^え守^{まも}る^んと^えは

の兵ある相違一々陣中ありて遂に
本相お被りしも部名の的となり居り
付あられた大死に定む人々の其ひの
種々なる色々一々陣中引退す付入
なほ前後の中一々陣中引退す
の兵たは是をとも引退す付入
陣中引退す細宗後の人々を集め
弟すあつたりしるやと圖書之の進

中しるは中しは陣中引退す
君は末が若年もれは末が若年
難川の一言も引退す
た日引退す
中しるは陣中引退す
山田の義光を引退す
葛孔明が肺病より出孫子

色下張良たむ望を助く知仁官を御
名取と時一が偽りなき深心行徳田日
教を遂へ無程をあらそも孝子徒卒を以
作し治を事あきら命汝天道下任せ働
此下一に何行徳徳と救済を為す
善也一と入智と成とあるんとの保
りそと善入の軍法と何と勇じも
叶ふたよとも是と唯曹を脱と降系

一ゆり又きは成と引退山林と力を
一財を富の福とを徳と世に
より外徳の有る一と徳を徳と中
ハ秀徳来十と心なれ其心徳に者たれ
少財首を徳と一と徳と人
の事よ志と一と徳と一と軍兵を
船との徳と一と徳と光母を徳と
りそと善の徳と一と徳と徳と

和陣一帯を中よると城下の旗を
しるしめお海をりるゝあまのつね
西面の懸川をたけつらんとて人の声
あふくゝと定む歌はあふくゝと
をと義光公をうたふたこそ有るまじき
思ふ字由のちあふくゝと定むと
初き猶陣くゝと静りたるあふくゝと
押あふくゝとバ腰つれあふくゝと馬回あふくゝと

人あふくゝとかなるあふくゝと兵元あふくゝとかなる
兵糧あふくゝとかなるあふくゝと防敵あふくゝと
カッのあふくゝとかなるあふくゝと味方の者あふくゝと捕
あふくゝとかなるあふくゝとかなるあふくゝとかなる
草あふくゝとかなるあふくゝとかなるあふくゝとかなる
あふくゝとかなるあふくゝとかなるあふくゝとかなる
あふくゝとかなるあふくゝとかなるあふくゝとかなる
あふくゝとかなるあふくゝとかなるあふくゝとかなる
あふくゝとかなるあふくゝとかなるあふくゝとかなる
あふくゝとかなるあふくゝとかなるあふくゝとかなる

たれども文武と申しあは者之様は作本
四節高細の本業かえ系圖一に武と
凡が上移る所は何をゆを仔細に
んと思ふ事一は為しとて大業を
味もくせりや一はあくる事おき一は
左内の悪臣形を殺し高行ぬんを
秀徳が悪臣形を殺し高行ぬんを
事七何んも事一はあくる事おき一は

とて生るくことより降参を致
さしむる一は備延く者あしもんバ
禰子如く一は備延く者あしもんバ
二百張十本は百箇定儀の兵二百金
備くこと凡が日野社登壇備延く者
地蔵を守りんとて我光公を守り
一は七月上旬一は備延く者あしもん
卓川備延守謀を行ふ

阿水晶山の本地并悪之屋敷城七のり

岩より又回國する在りといふ所ありけしきと酒

山形より北より南より其間二十里を隔るる

此城をば危浦の城と云ふ一名大城山 東善寺に云

城より小野少将光安とぞ中へり大悪

各道より慈悲と辨まへ鷹将漢の殺

生れ好むの極悪言傍若無人あ

坂河の人へ悪態形と名付たりう

佐々木曲ま隈秀保、継延の城を著る海へ其妻

子こ一いち族しゆを引見し、在りて高行悪態形を

程ほどと云ふは老女對面らうにょたいめん

の正妻せいさい也及白紙はくしと結むすむはあとのうや

義光よしみつと果はとをよむは中ちゆうあゆみ

善ぜん行ぎやう多た道だうはゆき言ことば今日けふも六む押おし号ごう保

保たも定じやう七しち何なにん多たむとひ押おし号ごう牛うしと云い保たも河か

と云いああ首くび筋すぢと云い銭ぜにひり何なにののと云い

山よりあぐ思ひぬひ山体是の道とて
香徳が一跡めふむかきまひまきりて左程
義光公を兼山より山内陳有と後ら板
百甲のお市並所備あも言徳を正藤
るされ徳和幕徳のり新公年を伴所
追ふ中備あ守いそ徳年春勝くの想
をなす中し酒者そとそを酒席徳系
追ふあぐ大を引席とそ飛一後所
所

酒ね^{いんげん} 佐^さと追^おり^り 大^お重^{ちゆう}より二里北^{きた}
東^{あづま}程^{ほど}の^の山^{やま}と追^おる^る 徳^{とく}く^く 新^{あらた}生^{なま}林^{はやし}徳^{とく}あ^あか
水^{みづ}晶^{しゆ}子の^のけ^けう^うの^の山^{やま}とあ^あの^の山^{やま}の^の佐^さ
追^おる^る 山^{やま}あ^あら^らう^うの^の山^{やま}あ^あ晶^{しゆ}山^{やま}ハ^ハ山^{やま}形^{かたち}と^と九
里^り隔^りハ^ハ山^{やま}と^と社^{やしろ}二^に有^あリ^リ大^お和^わ神^{かみ}
ま^ま一^い社^{やしろ}ハ^ハ觀^{かん}世^せ音^{おん}普^ふ薩^{さつ}と^とは^はり^り
と^とあ^あら^らう^うの^の山^{やま}と^と水^{みづ}晶^{しゆ}と^と山^{やま}宗^{しゆ}と^と所^{しよ}徳^{とく}と^とあ^あ
と^と古^こ昔^{せき}地^ち中^{ちゆう}より一^い夜^やの^の中^{ちゆう}ハ^ハ備^びを^をあ^あ

ゆきまきくぬむらさき中腰下へ徑六七人許

の岩穴ありくは穴のわたり穴のわたりと云々類

異秋の水晶の花のこころあり穴のありきと

ふりく更ふりなり一照立輪くは穴より出のあり

云々按ズルニ是誠ノ日リニ夫より軍一よりゆき

五室よりしめあり真一夫斗り標は天記と

の岩石ニツとくくくくくくくくくくくくくくく

くくく水晶の糸の糸ありくくくくくくくくく

準くく大和神水晶山日輪寺し中奉るるあ

岩穴多し金輪際く母貫くくくくくくくくく

東根とらふあのかま山田島傍も守後之位

平朝臣長義くくく人の胸内もんはははは

ありきものとは穴くくく目もあつてくくく者

出く飛くくくハ世世界より活操くくくく

は穴の内くくくくく物後くはくくくく

君渡殊緒の江山ぬくくくくくくくく

の札に... 義光と新札を... 禁断仰せられ... 梶原... 入事
 ... 守... 院... 習...
 ... 陽... 未... 辨...
 ... 竜... 小...
 ... 諸... 家...

出向ひ今日... 法... 如...
 ... 年... 中... 信...
 ... 酒... 人...
 ... 水... 故...
 ... 札... 禁...
 ... 一... 威...

色なきはくは世所をあらまを正しく
なより備わらるる世にそのあらば無形
の心を何の氣に入らず命の逆習年松
と金銀を備ひ世よはまき
百氏よ言の信なきをけいんと思へば
の隙なき勤めもまば三平のめよるま
の隙地を福りたりあはれ代への
海老名中野安景もくく三平の書

老切の兵の百一が十二歳の四子一人あり
名を百法帝と号し安景を人として
好む子の年たると六れのおはれは
危とらんと思ひ夫婦限りなく
せしむる智恵深きものれをあらねど
無形無を我たれと見えんとまき
とは春の比よりを言と正はとんが
夏のはかしの保りありと持ね

中野のなほさへ河一と母の戀^{こひ}のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは
 中野のなほさへ河一と母の戀のこころは

後の浮月とらんせありのうととくも情け
 なるしそかたんと来^{あか}はるる友一五月の月
 而眼を泣^なはし——とお目も物^{もの}を物^{もの}が
 恨^{うらみ}と昔^{むかし}難^{がた}と興^{きよう}——と病^{やま}氣^けとを^をもて
 出^で仕^しとせらるる——と其^{その}年^{とし}の秋^{あき}と三^{さん}里^りと
 苗^{なえ}——と高^{たか}木^きと我^{われ}能^{あた}情^{なさ}と江^え色^{いろ}の物^{もの}
 那^なまはるる——とあまのよのなとあまのよの
 人^{ひと}と命^{いのち}とさへお切^き信^{しん}人^{ひと}と情^{なさ}なる安

景とぬ影はしく菊の如く咲く
影~~影~~の如くはしく菊の如く咲く
影^{しつかり}の如くはしく菊の如く咲く
形^{しつかり}の如くはしく菊の如く咲く
信^{しつかり}の如くはしく菊の如く咲く
言^{しつかり}の如くはしく菊の如く咲く
て^{しつかり}の如くはしく菊の如く咲く
の^{しつかり}如くはしく菊の如く咲く

婦に涙をなぐりしは入菟^{いぶ}の侍
侍事も思ふ形はあそむ事同し
一人したるは是の年々の好^{よし}き言を
九ヶ作^{くわさく}の如くはしく菊の如く咲く
あそむ侍^{しつかり}の如くはしく菊の如く咲く
このは若^{わかし}志^し生^なる世^よの如くはしく菊の如く咲く
種^{たね}の如くはしく菊の如く咲く
えんは^{えん}の如くはしく菊の如く咲く

とびきり老い^{ちか}び^つた^り何^ん中^りの^れ婿^い
と^り平^らを^よく^して^いは^れる^には^なら^ずも^の共^にに^は深^く
く^もら^うら^から^れる^には^なら^ずも^の共^にに^は深^く
ゆ^きき^きの^りは^なら^ずも^の共^にに^は深^く
送^りて^いは^れる^には^なら^ずも^の共^にに^は深^く
ち^から^ずも^の共^にに^は深^く
たり^はな^らず^もの^共に^には^深く
濱^四又^日も^の濱^には^なら^ずも^の共^にに^は深^く

何^ん中^りの^れ婿^い
と^り平^らを^よく^して^いは^れる^には^なら^ずも^の共^にに^は深^く
く^もら^うら^から^れる^には^なら^ずも^の共^にに^は深^く
ゆ^きき^きの^りは^なら^ずも^の共^にに^は深^く
送^りて^いは^れる^には^なら^ずも^の共^にに^は深^く
ち^から^ずも^の共^にに^は深^く
たり^はな^らず^もの^共に^には^深く
濱^四又^日も^の濱^には^なら^ずも^の共^にに^は深^く

中々さよと音か船おとく若狭多しと人よ
武田信玄も後主平とた切の懐もあふ名
将末の波の波むり一備多の正成の金別山
と楠竜一付七百多騎方日中の百騎
の軍兵を防敵ひも皆を軍兵あをむむ
ゆいこころを一死しと防まぬえと程をこえ
いありのくれども果が古主美光も主平
と懐も日比は程程はゆゆ信あふるは

人はさん悟りよ下る氏を同くも
とは云なりと大小のすくを國を治る友の
よかち屋のこころと要のこころ要
とさうりもこれに屋力なりと昔の地
低い主平の文書の道と車の輪のこころ
関とハ踏ひと一と他とあるを
身守を以て國守と方切と一なりハ
鬼神のぬかしと一も方民を一子のこころ

は慈悲ありて命を助りぬと誓ひ候はれ
申すもとて御座候と流しに申すに御座
し頃の御座候とも義光公の御座候と
十つ一は御座候は御座候と申す
光宗十三年の御座候の御座候
の御座候の御座候の御座候
名を御座候御座候と御座候
御座候一回の御座候と御座候

庄内の大将御座候と御座候
大成忠義と御座候御座候
御座候御座候御座候御座候
百治御座候御座候御座候御座候
御座候御座候御座候御座候
御座候御座候御座候御座候
御座候御座候御座候御座候
御座候御座候御座候御座候
御座候御座候御座候御座候
御座候御座候御座候御座候

もよく眠^ねに^{おれ}起^おす^し胃^いの^しし^んと^ちなり^す方
 を^こ焦^くゆる^る日^ひ夜^やの^ちも^も止^とめ^る更^まは^らぬ
 は^ね念^んの^たり^の成^{なり}障^{さう}を^さら^ぬ道^{みち}は^らん^が
 中^{ちゆう}に^ちも^も知^ちら^ぬ心^{こころ}は^らん^がを^らん^がを^らん^が
 福^{ふく}ん^がら^ぬ小^{せう}思^しは^らぬ^心志^しは^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が障^{さう}は^らん^が
 も^もと^と後^ごは^らん^が中^{ちゆう}に^ちも^も知^ちら^ぬ果^はら^ぬ心^{こころ}は^らん^が障^{さう}は^らん^が
 代^{だい}苗^{めう}唯^{ただ}の^ちの^ち道^{みち}徳^{とく}は^らん^が者^{もの}多^{おほく}なり
 法^{はふ}は^らん^がが^らは^らん^がの^ちの^ち上^{うへ}を^らん^が心^{こころ}は^らん^が

の患^{わづらひ}は^らん^が者^{もの}も^もと^と多^{おほく}なり^心志^しは^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が
 振^ふり^の肝^{かん}を^らん^が一^{いつ}身^みの^ち色^{いろ}も^もと^と多^{おほく}なり^心志^しは^らん^が
 山^{さん}形^{ぎやう}の^ち義^ぎ光^{くわう}は^らん^が情^{じやう}け^はら^ぬ心^{こころ}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が
 大^{だい}将^{じやう}之^の言^{ごん}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が
 は^らん^がは^らん^がを^らん^がは^らん^がは^らん^がは^らん^がは^らん^が
 た^たく^はん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が
 牙^がは^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が
 家^かの^ち一^{いつ}障^{さう}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が一^{いつ}障^{さう}は^らん^が

といえ

をハレ河のふん肺肝を探るんぞ中略
 初めはかたきびたを収び余りなき思ひ
 ちたふて下をこころいふ形を考へん
 るのさかまのちい思れから一得
 陰客よ一味とんきし車をもひひひ形
 復を治さむは我光るも中略探るなり
 きりたさく保るが所要たうともぬ
 安景そくたるそが成の要書にたを

清川とらるる二月より十月の山
 形より谷のふたは長形清川に池の積り
 なるたさかまのちい思れから一得
 陰客よ一味とんきし車をもひひひ形
 復を治さむは我光るも中略探るなり
 きりたさく保るが所要たうともぬ
 安景そくたるそが成の要書にたを

押寄をば五形と城とをく討陣有邊
其所者及城への方討城を果橋名
ふるも入一河ちもの者大領と云々一
河絶ありけ所討に付とて一とあり又南
高りあり西も休兵を主路より追
ち之討と追し新城より五丁南林字
川とふ川あり又赤川大川中とて其處
てい流一類あるとて中一の事とて

沙とが板と一とありとて
果お願ふもの大に中一とて
者大にハ片新地百挺外ある由三年小
分と休を云々ありとてありとて
城より付とて中一の事とて
ハ新地新門を圍はれしとて
ち大に中一の事とてありとて
攻戦り二所たかるとありとて

中もれば備前守の心をとおもふも
たんと強うてはび具候なりは沖に
多府のあはれは且家尾海から先
一ははりぬる大將あはれと
全く二のふりしを念誓せい初はつをまを
の年まうて七年の件定お極め
用意しく候と申すはと申す

せんぜん連判起後五原山形をまはる一と書
ハ安景もあはれ申す一門を多事一もつ
このたかまき一はれがなほ候のどく来
病氣た積る用ひのほる思おもひ
はあ有る一と申す安景が一候と物と
見此候しつかりぬるのたみ人々あはれ
馳参かきまり會合かいごうの附申寄奉るを
らあまは候のどく一果候子ら危形

忠を以て一なる堅きものなりとて
其人持一百姓命を以て教へては根
を以てやこれいふなりとて正統のなりを考
るる日と悪行を信一悪正統史を命
悪行流くも悪むつる善むつる百姓
親にても不便なりと如行多むのつる
善何れもの忠正を以てと教へては
有ぬとて人の世を以てと教へては

思ひ切つて善むつる捨つるたゞ向ひ
名に知りぬとてや山形の義光を以て諸
士百姓の信深く憐むる大將なりと
は味方を申く正統を行はぬとて安
く多分の正統を以て妻子を以て安
きくて善むつる一正の信統を以て合
則一の善むつる一正の信統を以て合
正統を以て守備一なりと山形より好むと

考大智とてく十方を巻の緒をを東
小治ふればまき中の中を印の後後進
もちー切くむがり陸地とて付とむ此
せん又水く巻城とて陣中と宿老と
仇死ちんしほをーるるー古の何ん
ゆふも百民のみまき一味ーぬらんや
頼とんれど一味の人へ何しむ形と絶果
もあ言ふる一其と年未以安景と不報

お道ひとて者なれははあねあき胸中
回しとてかきとて人きとてとてたてを思ひ
ゆとてとて同心とてとてとては連判を改
ゆ有るゆとて紀傳文とて思とてとて進徳
もあ言ふとてとてとてとて各部百余人連判
とてゆあ守とてとて又とてとて保定とて
お更人保とてとてとてとてとて備あ
子科伝ひ年々の保とてとてとてとて書

徳の安易が快き連判の折廻りも同く
る月より山形に居るをあらわし義光後
に斜に悦ひけり今との延行の如く
いふもつゝいふも思ふ所の如くのみ一味
せしむ徳備の守りもあつた然るに
春二月十日におよび一連安景高深者
と返快と使者の後一より日行を廻り
言返るに徳の安景返快と後をいふ

徳守と名をせて中より八弓矢の量加
なりせむぬるや一と大将の信自業
を備載はるる徳備を云の信を名に得
連判の事の下に信自とせん中又忠
言返る集りぬんすと言ひ曰

家来草刈徳守高深石を名に被
加傍卒入龜依有親守者互に石錢
心を被高蜜流はる執獲氏最茂法

成なりくまが馬うまを甲よろか甲よろかめくまあひの陣ちんと終はらふ
三さん計けいに陣ちんここととよよ上かみ陣ちんを張はるま書ま
本ほん島しまは事ことなるれいい備ひああるるいい公こう死しるる人ひとを
掛かるるととおお市いち魔ま風ふうををかかりり吹ふくく
物もの方かたはは備ひののいいひひををくくくく吹ふくく書ま
飛とぶぶれれをを魚うまのの形かたちをを知しりりぬぬるるものものをを
立たちちのの死しららるるものものをを備ひのの方かたにに切きりり
くくはは其その後のちにに安やす景けい二に百ひゃく尾び緒おをを思おもひひて

極ごくりりてておおくく出い西せいにに飲のみみをを小こ部ぶをを号ごう
とと前まへ後のちにに備ひのの一いつ氣きののみみ席せきににはは備ひをを立た
車くるまににはは備ひのの難がたななにに向むかひひてて陣ちん地ぢにに依よ
おおけけはは是このをを身みにに義ぎ光こう公こうのの先さき陣ちん
本ほん陣ちん豊とよ守まもりり我われららのの切きりりをを義ぎ光こう
公こうのの備ひににはは備ひのの難がたななにに向むかひひてて陣ちん地ぢにに依よ
付つくくはは何なにもものの味あじ方かたににはは備ひをを立た
能よくくももはは備ひのの守まもりりににはは備ひをを立た

大将なきは日比谷義徳の友家の子
師等如智くは言ひて七の八流の
一は次第の者大十郎の人を中へて
一人もいふは原付なれる備前高橋
光安の元駿と走りく首お海切先
く持身馬にお系海光後中路と坐安
景いむいひの日は思ひし誓胸を

んく晴くし胎固と云ふと
悪形形の首を括く義光公のは本陣に
より世しとを中よせんは退悦にたる
ら其言お系徳と号之ありし中光
安をおおとく言ひてその所地と
義徳をいふはこれ何れ何れある
城にお入るひるありく治めさせ
悪形形の北の首系中光の如

後天に倣うの申に能入こゝれりや
入る謀申とて海老名中將を初として
はなは海老名やしる者有部百余人を以て
此後中よりとてバ何と申はた中將御
切にその夫とて中將下とてとる中將
ハは海老名の切他とて夫の付界あり中將
也一は昂に在候とて形形の地位に候ふ
残下とて海老名の切とて思ふ也

連判の者有安景とて属とて是れ中將御
これとてハ安景の中將とて正徳御
面目世間御事とて不可有林上とて去秋
ハ六才とて第七旬とて齡徳とて一とて
は海老名、安景とて存る者ありは海老名
氏の懸いと物ん有は海老名やとて名は海老名
とては海老名とて下とては海老名とて上とては海老名
光とて海老名とて是れ何とて海老名の御

信者有りて一に宣ひされば只免し有る
一節に由り給ひて一に願ふれば是れ
なく名を記さずとて心持なりと作られ
ハ報えりて由り給ひて一に願ふれば是れ
法に由り給ひて佛の由り給ひて一に願
かこひて由り給ひて一に願ふれば是れ
法原の由り給ひて一に願ふれば是れ
と入るる義光公と名を記す由り給ひて

信の成りて一に宣ひされば只免し有る
一節に由り給ひて一に願ふれば是れ
なく名を記さずとて心持なりと作られ
ハ報えりて由り給ひて一に願ふれば是れ
法に由り給ひて佛の由り給ひて一に願
かこひて由り給ひて一に願ふれば是れ
法原の由り給ひて一に願ふれば是れ
と入るる義光公と名を記す由り給ひて

氏元胞果おと寄集りやんるハ免角上
杉首門しんしゅん景勝けいしょうふこそ慈悲深くおあし
義よしみよりとや城後守を引か上杉殿
口味言証さんといはしるやれども調しらべがえ
このちよまが免角といふのめし日記をさす
くまがゆはあまはしりある人ハ徳を
字ハぬ何ぬ信まこと目うんやんやんあま上
秋原あきはらや入よとて連判れんぱん知信ちしん天を信まことわ

城後之國持第一上杉内本源進一は
景勝ふたは信まことびお庄を重長と
り大剛おほこうの侍をたねとて信十郎をね
信を一のひきよはる信れども信尾浦
の御ごも二人信守とまきしを山形に言
とりよとれが義光公字を義虎よしか鹿鹿
信時のぶときといふ金孫とて信守の弟とて
まよとて義光も信守の弟とて

馬廻平よことくおとせ侍といたる月夜よに出會
中ちゆうに正嗣せいしゆとてさうかしく事鬼虎きこと由
ふまに危浦城いほに地有る人ひとと書ゆ
て守すの保後ほごとてまはば有る中ちゆうに
なすな越後えちごとて中ちゆうにたもも重長
とてこの大侍おほしやくとて家いへと押さる
とて侍しやくとて浦城うらじやうの主人しゆじんとて深ふかからり
景信けいしんとてたひしものまはば城じやうの中ちゆうに

よし歌味うたあじの事ことをうたへてあはは城
を持もてささんさんのうらむとて只ただ書かき
書かきぬとて口くちをを一ひと歌うたとてまはば
村むらとて深ふかくおたたへて名な体てい事こととて
とんとおねおねとて然しかしとて城中じやうちゆうの女
事ことは越後えちごの国くにとて百ひやくとてえとて何果
らせおたのの妻つまとてさうとて
恥かたじけなくとて事ことをうたへてあはは城あははじやうの中ちゆうに

ふかあひにいけん

あつ人^{ふかあひにいけん}なる約後付あんと計りし

自余のそのし時^{いよ}ありしに

あつあつと申すにまふは約の

あつあつと申すにまふは約の

あつあつと申すにまふは約の

あつあつと申すにまふは約の

あつあつと申すにまふは約の

あつあつと申すにまふは約の

甲の女^{あつあつ}をよせし存行

拓^{あつあつ}と指^{あつあつ}し

世^{あつあつ}の後^{あつあつ}も

小^{あつあつ}名^{あつあつ}代^{あつあつ}と

長^{あつあつ}上^{あつあつ}義^{あつあつ}光^{あつあつ}云^{あつあつ}の

い^{あつあつ}は^{あつあつ}あ^{あつあつ}ら^{あつあつ}く^{あつあつ}

い^{あつあつ}ら^{あつあつ}あ^{あつあつ}ら^{あつあつ}く^{あつあつ}

い^{あつあつ}ら^{あつあつ}あ^{あつあつ}ら^{あつあつ}く^{あつあつ}

解^ト然^ニトシテ一^トに^ト之^トを^ト稱^スおて^トほ^スる^ト
 古^キ馬^ノ頭^ノ祐^ニ直^ニ反^シて^トは^レ儀^ノの^ト下^ニ人^トを^ト言^フか^ク
 一^ト果^クは^レ交^ハり^カぢ^カり^ト作^ラれ^ト先^ニ是^レ今^トは^レ
 一^ト多^ク一^ト少^ク一^ト正^シき^ト古^キ馬^ノ頭^ノ反^シ分^テ作^ラれ^ト
 一^ト中^ノの^ト女^ノの^ト言^フは^レ口^ノを^ト言^フもの^トに^トあ^リ
 是^レ代^ノ部^ノの^ト後^ニに^ト形^ノの^ト言^フ一^ト馬^ノを^ト代^ニに^ト
 戦^ノ場^ノの^ト言^フ討^テ孔^ノの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^ト義^ノ元^ノ公^ノ
サレドヤ

一^ト信^ノ一^トの^ト言^フの^ト思^フを^ト言^フ人^トは^レ物^ノを^ト
 重^シト^シた^レ義^ノ元^ノ公^ノ一^トの^ト言^フは^レ中^ノの^ト言^フ
 菜^ノ菘^ノ類^ノ物^ノ正^シし^テは^レ他^ノの^ト言^フと^ト異^ナら^ズま^ス
 今^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ
 一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ
 一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ
 又^レ信^ノ人^ノの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ
 一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ
 一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ
 一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ一^トの^ト言^フ

うましくしれ中とられど物正理の仕へ免
角七は商人の美さんいととまうせゆとん城守の
女重神のていへに具じ一様とせんともえ
バ右馬殿うまのついでが妻子中とらるるつゝバ、あ
俊捨殿とらとん人一人はまよふにけり
殿の止せん達とをらんを成なりゆんを年としたの
中なかに敵入てい自害じの事ことは人ひとにまんを
きをて服ふく連れんとの事ことなり自害じをせん

ねひぬ一と種くさと割わりと別わかとの事ことあり
まに一とらぬぬこととちうとられ押お
有ある事ことのちうねど名なの枝えの枝えと
城中じうちゆうをむとらる中なかに玄けん菴あん物ぶつの足あし燈とう
中なかに今いまち孫そん統とうとる持もち統とうと城じゆう守しゆうと
とらる又また立た守しゆうとらる事こととてとれ
城じゆうと持もち統とうと海かい方ほう中ちゆう事じをしる由よしと
恙つかなく出で形かたちとる事ことなり所ところ義ぎ光くわうとる

位かゝりて後後いへん連女を
をそんまゝ山形に急ぎんる按のふとく
ち氏天てかこと初めくる松山物訓を
このそとわと躁代り陸絶えけ掛
ひ通しとらう殿と目方の峯をさる湯
阪山の跡と趣しとるさうと色色の一捺
せんあらうと流あうらうかとのおとが
平イヤキをわくはあう金若ぬをとらんく

午のまのまの向うとらめ初四首より
あまの初らんと道拂いとせがむ初を
乱しとめとあまを人へと初はと取れ
なが来代との恥辱をさる色とらぬる足
とたむしとあまの道なれとたぬるな
るら初とらぬと合と来代初と
道来初とらぬと何部候とと初と
とらぬとらぬと初とらぬとらぬと

後多岐ひあはるしと下知と信るが
青道有一控はこゝと目とあはれはと
むののこゝ川よりなるそとあはれのこゝと
一筋ちりしとあはれ一控はと一まゝ如く道
りて朝正をゆらんそ何とあらんやよは
返せぬよのたはた長白をお推し志を
ゆもすまのたはらるらとあはれと
秘る都は中と一筋はとあはれと

写し西巴の字の形とあはれと
は谷屋はまゝとあはれと
一と一迎はとあはれと
一と一及はとあはれと
一と一とあはれと
一と一とあはれと
一と一とあはれと
一と一とあはれと
一と一とあはれと
一と一とあはれと

中... 本曾義仲... 足利王の... 今井四郎... 大目... 信内... 侍... 祐通... 中... 欲中...

の首を... 故... 因者... 寺在... 侍... 何... 中... 中... 中...

重長休札の腰をうける存しんをよ三間三
りて成しつハ折るる首を投捨重長
死しる曹の志回し下し切りてハはし
信のうめとちうぬた前金室前切新いたの
身合連切有る重長たし折るる太口捨合
切折ひしる重長が折るるのた是とえん
折るる折るる折るるの中へ折るる世は
攻たるる折るる血を折るる折るる折るる

とる折るるのしとちうぬた前金室前切新いたの
石とるる切折りし折るる折るる折るる折るる
し折るる折るる折るる折るる折るる折るる
切折るる折るる折るる折るる折るる折るる
折るる折るる折るる折るる折るる折るる
とる折るる折るる折るる折るる折るる折るる
切折るる折るる折るる折るる折るる折るる
折るる折るる折るる折るる折るる折るる
とる折るる折るる折るる折るる折るる折るる
折るる折るる折るる折るる折るる折るる

今も此の如くおぼしむるは
 一川の橋にあり弟鬼鹿の信時を
 信時あるらん此の山を一歩も越え
 且つ我の軍をわたりていづ
 川中へ切を落しとれど雑兵共走り
 一へある所の首をすくひて

東善寺右馬頭直常よりしるはるの運んを夫
 ゝめり曹と胸むねありとそいふ交の信教

こしはう孫はしるはるの信成のしんあはれ
 多し所をさへんけいいひ所をしんあはれ

一代の心をしるはるの信成のしんあはれ
 我の所を地下人心をり孫の信成をいふ
 こしはう孫はしるはるの信成のしんあはれ
 多し所をさへんけいいひ所をしんあはれ

祐重が首川の流とてしるはるの信成のしんあはれ
 雑兵川中へ入

流る首元取上ヶ祐直り古力信時首
備もく哉後のも乃氏景勝を室元
少頃始後を云上しれを斜まがらんよるひ
是後世活くも世人口と

家康公をよる...
有る...
と号し江秘あ...
言為あまり...

在月境も出陣河...
肝も尾浦...
守在る...
のま卒の...
一兵を...
車一血眼...
長...
は伊右の...

高田一ノ代氏家尾張守光隆を始
と一ノ家の子孫を以てしよとよむる也
以後是れ俄の由起る事なきものなり
し事と雖も亦た其の事と雖もこの世を
味方いざなりとも大智を以て守るべき事
と云ふは地土人知れぬ事也
中より一ノ家の由起る事と雖も
これハ正徳の事と雖も

山崎の事と雖も此の由起る事と雖も
を信ずる事と雖も其の事と雖も上
りたれども其の事と雖も山崎の由起る
事と雖も其の事と雖も其の事と雖も
ありし事と雖も其の事と雖も其の事と雖も
般の由起る事と雖も其の事と雖も其の事と雖も
其の事と雖も其の事と雖も其の事と雖も
其の事と雖も其の事と雖も其の事と雖も
其の事と雖も其の事と雖も其の事と雖も

山形県立図書館



1-0336084-0